全国公立学校退職教頭会
会報
第60号

平成27年3月31日

東京都港区愛宕
1－6－7
愛宕山弁護士ビル
403号

発行責任者
会長　金子　冨美子

東京駅百周年

教頭職を全うした人生に誇りを

全国公立学校退職教頭会　副会長　上辻　敏雄

人間の人生は常に自分を振り返りつつ、時を刻み、その記憶を残しながら、前へ進んでいく。それだから、失われた時はよみがえり、百年の記憶、十年の記憶はまためぐってきて、自分を振り返らせる。そして、また未来へと歩いて行く、振り返るために。と教えて下さった方がいる。

今から十年前の義務教育改革推進の指標に義務教育は

○国家、社会の形成者となるべき次世代の育成

○一人一人の子どもが一生幸せに生きるための土台を作る

という二つの目的を持つものであり、すべての教育の土台となるものである、と述べている。

更に、中教審答申として「新しい時代の義務教育を創造する」として学校の教育力「学校力」を強化し、教師の力量「教師力」を強化し、子どもたちの「人間力」を豊かに育てる。としている。

現在はどうなっているのだろうか。昨年十二月に開催された「教師力シンポジュウム」では、これからの時代には

・意思疎通の質とスピードが高める。
・グローバル社会、地域社会への個人の関与が強まる。
・一生楽しく学び続ける学習継続力が重要になる。
・多様な人々と協働する機会が増える。
・知識、技能とその活用力が重要になる。
・思考力、判断力、表現力が重要になる。
・答えのない問題を発見し、解決する問題解決能力が重要になる。
・予想外の変化に即座に対応する臨機応変力が重要になる。
・多様な人々と協働するチーム力が重要になる。
・自分の目標を自分で見出して実践する主体性が重要になる。
・「主体性」とは自分の目標を自分で見出し実践する力である。
・自分の目標を持っている人の心は、その目標が達成されるように働く。
・主体性は人の心を感じる力、多様な人々と協働する力をもたらす。
・主体性は想像力、臨機応変力、並行処理力、人間としての一貫性をもたらす。
・主体性は学び続ける力、内省する力、創造的に思考し実践する力をもたらす。
・主体性は答のない問題に挑戦する力をもたらす。
・主体性はチーム力をもたらす。

と討議されていました。

問題解決力、臨機応変力とは、

問題解決力は・答のない漠然とした状況を問題として理解し答を見つけ出す力。

臨機応変力は・答のない漠然とした、共通目標の生成、未知の他者の心を感じる意思疎通知識・技能活用する力。このように随分と変容していることが観て取れる。

現在の学校現場での職階制も随分と変容していることが推測できる。思えば教頭の職制化が昭和三十二年十二月でした。職務内容などの規定であった。その後昭和六十年四月に管理職手当支給開始であった。昭和四十九年六月学校教育法改正でやっと教頭職法制化で職が確定し不安定な職が法的に陽の目を見たという歴史がある。

世界に冠たる激職の教頭職を無事に全う出来たことに皆様共々に誇りを持ちたいと思う昨今である。教頭会の今後も益々の繁栄と会員の皆様のご健勝を祈念してやみません。

各都県から発行されました会報の中から会員の皆様方の、心に残る思い出や、ボランティア活動、今思うことなどを特集しました。

静岡県

危機が続く「静退教」

◇危機打開のために

会長　小田木　好

かつては五百余名の会員で組織されていた「静退教」近年の会員減少で、昨年度は三百余名となり、皆さんの熱心な取り組みにもかかわらず「静退教」の危機が続いております。

本年三月（昨年度末）教員異動発表後、地区会長さんの協力で、退職される教頭先生（勤務校）へ入会案内を送っていただきました。早速入会金など送って下さった方、四名入会した地区など、これも危機打開のきっかけになるのでは……と思っています。

未入会者の加入促進。役員の交代。地区の運営など、危機打開のために、本年度も、共に努力したいと考えています。

町内会の仕事に関わって

静岡地区　成岡　博

定年退職してまもなく二年が過ぎようとしていた頃、町内の役員さんが我が家を訪れました。「町内会の役員をやってもらえませんか。一ヶ月に二回ほど役員会に出るだけでいいから。」ということでした。それくらいならなんとかなるだろうと引き受けることにしました。仕事は、会計補佐（公民館会計の事務）と役員会等の議事録をとって次回報告するという書記の仕事でした。

前任者と引き継ぎを終え始めてみると、会計関係の入出金、市役所や小中学校への連絡や朝の旗振り等々一ヶ月に二日程度では済まない仕事でした。

どうやらこうやら仕事に慣れ始めた二〇十一年三月十一日、東日本大震災が起きました。自分の住んでいる町内の一部は、東海地震の際、津波被害で浸水すると予想される地域に含まれています。そこで、町内で、二回に分けて、市の防災課職員の参加を得て住民と津波に関する勉強会、話し合いを持ちました。また、どのように避難訓練を行うのか話し合い、訓練を実施しました。

大地震が起きた時に、津波被害が予想されるために避難場所を考えました。町内には大きな建物がないため、四階建てのマンションがどこにあるか調べて回り、オーナーや管理会社に大津波発生の警報が出たときには、避難させてもらえるように交渉しました。地震が起きた際、水の確保も兼ねて自噴井戸も調べました。了解を得た建物と井戸を町内の津波避難マップとして作成し、全家庭に配付しました。町内の皆さんに大変喜んでいただきました。

町内には、ごみの収集場所、その他様々な問題があります。このように町内の仕事に関わって、以前は漫然と見ていた町内をどこに問題があるのか、どうしたらいいか意識して見るように変わってきました。

日本語講座の講師として

富士地区　桑原　照子

四年前に退職してすぐ参加したのが、「外国人のための富士日本語講座」です。この講座は、富士市の小中学校を退職された先生方が、ボランティアで二十五年前に開始されたものです。延べ百人近い先輩方が講師として参加されています。

様々な理由で来日した外国人にとって、生活する上で一番大きな壁が言葉の問題です。日常会話は徐々にできるようになってきますが、文章を読んだり書いたりすることは学習しないと身につきません。日本語力に応じてクラスを分け、一人ひとりの希望に沿って指導します。私か担当しているのは、日本での生活が数年以上で、仕事に就いている方や子育て中の方です。

毎週水曜日の九十分間がレッスン時間です。四、五人のグループで日常生活の中の疑問や思いを出し合って話し合います。日本の習慣と自国との違い、子育てに関する悩み、仕事上の問題など、話題は尽きません。日本語で真剣に話し合うことで、日本語力だけでなく互いの仲間意識も深まっていきます。

あるときブラジルの方から「日本の無人販売の不思議さ」について話題が提供されました。誰も見ていなくても野菜や花は代金が支払われているのはなぜ？という質問に私の方が驚いてしまいました。

フィリピンの方も韓国の方も自国ではありえないことだそうです。

学校に勤務していたときには見えなかった外国から来られた方々の生活や思い、それらに直接触れることによって私が学ばせていただくことばかりです。少しは視野が広がったかなと思っています。

愛媛県

小さな生き物たちの大きな力

会長　野本　千壽子

私の専門教科は家庭科でした。若い頃、朝日新聞に連載されていた、有吉佐和子さんの『複合汚染』を読み、スーツケースの中に忘れていた輸入レモンが、一ヶ月たっても腐らないのは農薬処理汚染だったことを知り、何とか子どもたちにも、農薬の怖さを伝えたいと、家庭科で食品添加物や環境問題をとりあげ続けました。

今から十二年前に、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」を読んだときは、もっと大きな衝撃を受けました。人を殺すために開発された化学兵器が、戦後、枯葉剤になったり殺虫剤になったり、また農薬などに変えられて、日常の生活の中に何の危機感もなく使用されているという現実。

今、CMに誘われて、何の疑いもなく使っている合成洗剤やシャンプー、ボディーソープやハミガキなどの多くの商品の中に、実は、発ガン性が心配される物質が使用されていることをほとんどの人が知りません。

ベビーソープやこどもハミガキの中にも入っていますから、生まれたときから、体の皮膚や粘膜を通して有害な物質がどんどん体の中に入ってきているのです。

日本人の九十七パーセントの人が合成洗剤を使い続けているのですから、一九八〇年頃を境に、病気による死亡率のトップがガンだということもうなずけます。今もなお、死亡率のトップはガンです。

無農薬野菜をつくり無添加の食品を選んで健康に気をつけていても、体の中で善玉菌が棲めない環境があるため、仕方がないのかなあと思っていた六年前、EM（有用微生物群）に出会いました。

現在、私の家には、掃除や洗濯は米のとぎ汁をEMで発酵させた『米のとぎ汁発酵液』とEM粉石鹸とEM食器洗い液体石鹸しかおいていません。トイレも浴槽も流しも手洗いも、床もガラスも食器も車も、これだけでピカピカで空気もさわやかです。

毛糸洗いも頑固な汚れも、きれいになり、ふわふわの仕上がりで消臭効果も抜群です。ふとんや枕も米のとぎ汁発酵液さえあれば、ふかふかになります。

今では、トマトを育てたり、メダカを飼ったりしてこの小さな微生物群の威力を試しています。

小・中学校七十六校のプールにも、EM活性液を投入して、プール清掃のお手伝いもしています。

先日伺った、愛媛大学附属特別支援学校では、十年前の教え子に出会い、感動の一時を過ごすことができました。

この微生物たちのお陰で、五年生の環境教育の出前授業にも行かせてもらっています。また、高齢者のサロンにも呼んでいただき、今年一月から十月末までに、四十八回の講習会をこなし、千三百十三名の方にEMと出会っていただきました。

目に見えない小さな生き物たちと上手に付き合うことが、健康にとっても環境にとってもどんなに大切かを実感しながら、大好きなEMを普及するためにがんばっています。

棚田の農村風景に思う

喜多支部　小野植　元幸

松山市余戸在住の河野豊氏の「棚田を守る」写真展が、東大洲Aコープで開かれ、（四月十三日～十八日）、最終日十八日会場に行った。

丁度、写真家河野豊氏と大洲支局新聞記者秦俊太郎氏に出会い、棚田を守る苦労を話し合った。

私の生家は山村の農家。次男坊で、時々学校の休み等に手伝った。棚田といっても比較的広く、農耕牛で耕すことができた。しかし、一枚一枚の棚田ごとに、石垣と土手の畦ぬり・草刈りに苦労した。畦ぬりは、水がぬけないように、土をねって一鍬一鍬、かけて壁のようにするのが腕にこたえた。土手の草は、鎌で刈るため長時間かかった。牛で耕すことのできない水田は、鍬で何度も耕した。

内子町北表の泉谷（約二・五ヘクタール）は、日本棚田百選に指定されている。その他、大洲市蔵川（四ヘクタール）、長浜町戒川の樫谷（約三ヘクター

ル）にも素晴らしい棚田がある。四十五点の作品。大型カラー、モノクロで見やすく、国土保全や水源涵養、水生植物保護の役割を果たすもので、一年耕作放棄すれば復元ができない。

泉谷棚田と周辺の山並みを高所から写した幅一・四メートル、高さ〇・九メートルの大型作品は迫力があり、心を癒す作品だった。鍬で畦を固める作業光景、斜面を「おいこ」で運ぶ高齢者の姿や、Uターン農家の充実した風貌、お年寄りの表情がとってもよい作品に感銘した。

今の時代、採算がとれない上に政府の減反政策や高齢者が年々増加する現状の中で過疎地をいかにして守っていくのか。後継者育成の組織づくりが課題である。

能登半島の輪島の「千枚田」。日本棚田百選の水田にも放棄地があり、地元の話では、都会より帰省しては棚田を守っている人もいるという。同じような悩みを持っておられた。

宇和島市遊子の水荷浦「遊子の段畑」は、日本棚畑百選に選定されており、現地の人々が保存運動を展開し、子供からお年寄りまで取り組み、行政機関を動かしイベントを実施し、人々を呼ぶ工夫をされている。先人の石垣積みや狭い畑の作物作りなど、遺産の継承に頭がさがり、「耕して天に至る」景観に感動した。

石を利用して、ひな人形を描き「ひな祭り」に展示して観光客を迎えている。また、霜が降りず、水はけがよいなどの自然条件や石垣の熱反射を利用した特産の段畑じゃがいもによる「遊子ふる里だんだん祭り」を行い、活性化に努めている。

霜が降りず、収穫時が全国でも一番早いと言われ、花が咲かず栄養を貯え、皮が薄く、甘くて、水はけのよさと日照りのためほくほくした食感は大人気である。じゃがいものビタミンCで風邪予防はじめカリウムでむくみを解消できるという効果がある。TPPに参加すると全国の農家は将来が不安になると反対する人が多く、政府としても「日本の農業を守る」体制で苦慮している。激変するであろう日本の農業。何とかして、農村の景観を守り、次代に継承してほしいと願うものである。

遊子の段畑の景観に正岡子規が感動。

峠から　見る段々の　青田かな

（明治二十六年作）

カレンダー　　**松山支部　藤本　宜彦**

年末には、近くの朝美農協にカレンダーをもらいに行く。余白が広くメモを入れやすいので、ここ十年は農協カレンダーにしている。

病院の日・町内会や各種会合の日・釣り予定日・飲み会日等々、月末にはメモは真っ黒になっている。何といっても、偶数月の十四～十五日の「共済年金支給日」メモは、◎印で記入している。

年金生活になると、収入源は、これが中心であり二ヶ月目が待ち遠しい。多分、どなたも同じではないだろうか。

年金も最近は減額傾向にあり、厳しい状況である。ただ、わたし達のような昭和十五年生まれの者は、退職と同時に比例部分・基礎部分と満額支給を受けており、満七十歳からの国保は、特例により窓口一割負担で優遇されてきた。今後退職される現職の方々には、厳しい時代になってくるに違いない。

カレンダーの「飲み会の日」は結構多い。ここ数年は休肝日無しの状態であり、朝酒の時もある。そろそろ手が震えてくる頃ではないかとも思っているが、今のところ大丈夫。

退職以来十二年間の「カレンダー」を保存しており、時々めくってみたりする。胃がんで入院した日、初めての痛風で病院にかけ込んだ日、猫がいなくなった日等々…。

これから先の事も思い巡らせるが、まだまだ過去を振り返る事の方が多い。あんな事もあったと。

さて、いつものように自転車で走ってくるか。

島根県

「新たな出会いに感謝」　　出雲市　松村　正利

私も、退職して十年となることから、本会創立十年と重なり、感慨深い思いです。同時に、月日の経

つことの早さを痛感している毎日です。退職後は、気のむくまま、思いつくまま、愛車で旅に出かけ、海岸線の美しさ、荒波に浸食された岩肌、美しい海の青さに引かれ、スケッチをしながら歩き回っていたのですが、…　やがて、地域での様々な活動に携わることになり、ここ数年は、それもかなわなくなっていた一年半前、思わぬ出会いが待っていました。

長年続いている水彩教室（「彩りクラブ」）の講師の依頼でした。私自身、水彩画を専門的に学んだこともなく、お断りしたのですが、どうしてもと頼まれ、「自分も、会員の皆さんと一緒に勉強させてもらう」ということで、引受けることにしました。

以来、月二回、二時間ずつ、四名（最近一名入会され現在五名）の皆さんと一緒に、水彩画に取り組んでいます。描きたい物を皆さんで持ち寄り、思い思いに描いています。絵と向き合う思い、集中力はすばらしく、一人ひとりの持ち味（個性）が画面いっぱいに表現され、完成した作品を見るにつけ、私自身、圧倒される思いです。

制作過程で、気づいたことをお互いに話し合いながら、和気あいあいとした雰囲気で、楽しく活動しています。

私にとって、モチーフと向き合う二時間は最も充実した時間であり、このような出会いを与えていただいたことに感謝しているこの頃です。

畑作一年生

大田市　山根　健二

平成二十五年三月に定年退職をしました。その間、平成四年九月島根医大病院に入院し胃の摘出手術をいたしました。勤務校の教職員の皆様には、私の健康に留意していただいたこと感謝しています。

退職後、それまでは母（今年で八十九歳）にすべてを任せていた、野菜づくりに挑戦することにしました。母にはまず畑を耕すことから教わりました。

『三木クワを使って耕すと深く楽に打てる、打つときは前に打っていきながらかれ草を打ったところに入れると肥やしになる』など初めて体験することばかりです。耕しが終わったら野菜が育ちやすいように肥やしを畑にふらないといけません。野菜によって肥やしが違うこと、元肥として牛ふんをしっかりまいておくと良いことなど、母には教わることばかりでした。

ナス、キュウリ、トマトの苗、春菊の種をそれぞれ買い求め昨年作った場所では育たない野菜があるというので母に植える場所を相談しながら植え付けをしました。その後の水やり、追い肥、消毒、間引きの仕方、時期など野菜の管理について個人レッスンを受けながら頑張っています。

野菜作りをしてみると、やはり近所の方の畑の出来栄えが気になるようになりました。天気の良い日には運動方々散歩をしています。その折、近所の野菜の出来栄えを見ながら自分の野菜と比べています。

出来栄えの良いものを作るにはやはり経験がものを言い、毎日畑に行って野菜の様子を見るような細かさが大切だと感じました。

夏には自分で育てたナス、キュウリ、トマト等収穫し家族で食べました。今まで当たり前のように食べていた野菜を自分で育てて食べるようになり、今まで母親が朝に夕に畑に行き野菜づくりをしていた苦労を思い知ることができました。秋には大根、白菜、レタスの種をまき、来年収穫する玉ねぎの苗を植え付けました。今後も母の教えを受けながら野菜づくりを楽しもうと思っています。

雑　想

松江市　郷原　敏秀

私が教頭に採用されたのは五十五歳、おそらく県下最高齢記録であろう。教頭としての勤務経験は同一校での五年間のみ。教頭経験者としては半人前というべきだろう。

平成十一年、三月三十一日夜九時過ぎ、私は松江二中の職員室にたった一人残っていた。「立つ鳥あとを濁さず」、時たま自分に言い聞かせながら、在籍した五年間の後始末を仕上げようとしていた。「もうこれで思い残すことは無い！」と自分で納得できたのは十時ちょっと前、それから最後の御奉公（＝職員室、玄関などの消灯・施錠）を終えて校舎の外に出た時には十時をだいぶ回っていた。

周囲の明るさにふと見上げると、校舎の斜め上に満月

に近い月がこうこうと輝いていた。広い駐車場には私の車だけがぽつんと二台、月の光を浴びて私を待っていた。座席に座りドアを閉めたとたん、思わず「ようし、終わった、終わったぞ！」と声が出た。安堵感、満足感、名残惜しさ、等々いろいろな思いがよぎったが、後悔や後ろめたさは無かった。ふと思いついて車を降りて校舎に一礼し、月に見送られながら学校を後にした。「やった！」と叫びたいような気持だった。今から十五年前、私の教員生活最後の日のことである。

その翌日から、教育関係の書籍、雑誌、文書などすべてを廃棄処分する作業に取りかかった。教員生活にはっきりとけじめをつけたかったからである。いろいろな思いが詰まったものもあったが、あれこれ迷う前にどんどんダンボールに詰め込み、市の処分場へ自己搬入した。三日目に終了し、長年書棚を占領していたむさ苦しい本が全て姿を消し、広くなったような部屋を眺め回した時は何とも清々しい気分であった。一冊の「赤本」だけが生き残り、本棚の隅で肩をすぼめていた。

四日には鳥取県羽合温泉で一泊、翌朝、朝ぶろで味わった開放感は今でも忘れられない。その後、四月六日から、「松江市PTA連合会　事務局」の仕事をし、八年後の平成十八年に退任し、今日に至っている。

最近は、旧知の方々から「どげしとらいますか」と訪ねられる度に「何にもしとーませんは、もうひまで、ひまで・・・」と答えている。世間様のお役に立つようなことはなに一つしていないこの身では、こう答える他に無いのである。ただ、ひまで困ることは無い。毎日、たとえ短時間でも、英語に触れることを自らに課しているからだ。

孫たちからどんな質問を受けても、英語のことなら自信を持って答えてやれる「じいじ」でありたいと思っている。とは言うものの、ザルに水を注ぐがごとくである。インプットしたはずのことが翌日にはほぼ完全に初期化されており、時には何を入力したかさえ思い出せないこともしばしばである。でも、この年になればそれもし方が無い、ザルに残った滴の一滴ずつでも溜めていけばよいと開き直っている。

「かたつぶり、そろそろ登れ不二の山」

（＝私の人生訓の一つ）

私も去年、「高貴」高齢者（俗に「後期」とも呼ばれているようである）と呼ばれる身分に出生させてもらった。幸いに、そして大変ありがたいことに、元気で不自由無く行動できる。なんとかやり遂げたいと思っている両親の墓への一千日墓参（四キロ、徒歩で一時間十五分）も七百日を越えた。毎朝仏壇に「今朝をありがとうございます。今日を頂きます。」と手を合わせている。

しかし、そろそろ私の人生の後始末に取掛かる時期かなと思い始めている。立つ鳥のように跡を濁したくないと思うからである。

広島県

笑顔で語り合い学びを深めた

福山地区女性部会　芦府ブロック担当

十月一日、「お久しぶりです」「お元気ですか」「ようこそいらっしゃいませ」と挨拶を交わしあいながら、福山地区女性部二十四名の方が、府中市の『まさご』に集まってくださいました。

会食後は、自己紹介と体験談で、なごやかに会を進めることができました。

病気、介護、祖母力発揮、畑づくり、趣味、旅行、地域福祉活動、ボランティア活動など幅広い内容で盛り上がりました。教頭現職時代、教育界の光と影を様々な状況を体験した私たちです。子どもたちのためにと勤めたことを誇りに、多くの方の退職後の生き方にも学び合いながら、これからも輝いていたいものです。

懇親会後は、「福山しんいち歴史民族博物館」に移動し、研修しました。福山北西部の繊維産業の礎である備後絣の保存と活用に特に取り組んでいる施設です。

館の方に備後絣の歴史、先人の知恵・技術革新など実物を前に詳しく説明していただきました。この施設は、初めて見学という方も多かったようで、参加の皆さんは、熱心に見学されました。

「女性部会に参加してよかった」と、これからも退職教頭としてのつながりが、